

論点

スーパー戦隊 放送50年

特撮ドラマ「スーパー戦隊シリーズ」の第1作放送から今年で50年。幅広い世代の視聴者を引きつけ、テレビ文化の一翼を担ってきた。なぜ半世紀もの長きにわたり愛され続けたのか。また、変化する社会や時代がどう作品に映し出されてきたのか。出演した俳優とテレビに詳しい識者、ジェンダー論の研究者に聞いた。

49
作
目
で
一
区
切
り

スーパー戦隊シリーズはテレビ朝日系で放送。1975年開始の第1作「秘密戦隊ゴレンジャー」以来、登場人物が赤や青、黄などの戦士に変身し、敵と戦う姿が「基本」の設定だ。放送中の「ナンバーワン戦隊ゴジュージャー」は49作目になる。テレ朝は来年、同シリーズの放送枠で新作特撮ドラマ「超宇宙刑事ギャバン インフィニティ」を始めると発表。50年続いたシリーズは一区切りとなる。

若松 孝司

愛知淑徳大教授

わかまつ・たかし

1968年生まれ。愛知県出身。名古屋大学院博士前期課程修了。2011年から愛知淑徳大交流文化学部教授。専門は国際政治学とジェンダー論。

＝写真は大塚提供



スーパー戦隊シリーズは当初から未就学の、特に男の子がメインターゲットでした。先行していた「仮面ライダー」や「ウルトラマン」の各シリーズとの違いは「戦うグループ」という点にあった。チームを描く場合、それぞれに役割を持たせることになりましたが、1作目の「秘密戦隊ゴレンジャー」では、女性の戦士が優しく、ほかのメンバーを包み込むような性格のキャラクターとして描かれていました。任務は武器開発や爆発物処理などでしたが、スーツの色はピンクでした。

社会変化に対応続けた「定番」

黄色にはそれぞれ、女性が求められる家庭と職場での役割が反映されていたのではないのでしょうか。2000年代になると、性別役割分業についての問題意識が、社会の中で高まるようになります。戦隊も「ピンクは女の子の色」というステレオタイプから脱却し、水色と白色の女性戦士のシリーズや、「暴太郎戦隊ドンブラザーズ」(22・23年)では男性戦士にピンクを使うなど変化してきました。放送中の「ナンバーワン戦隊ゴジュージャー」では、女性戦士の色として初めてフラックを使用しています。色だけでなく性格もパタン化していない登場人物が多い。「ゴレンジャー」から半世紀を経た最近の作品は、女の子の視聴者も意識し、固定化されない女性の役割を示していると言えます。社会の変化を映すという意味では、近年の作品は敵を敵としないケースも多くあります。以前は「地球を征服してきた敵」に立ち向かう勧善懲悪が主流でしたが、現在は途中で敵が味方になるなど、悪の描き方にも変化が見られます。何が良い、悪いは一概には言えないという考え方が広がってきたことが、作品にも反映されたと言えるのではないかと思います。

未就学の子供たちにとって、戦隊シリーズは、外の世界に出る前にチームワークや対人関係を習い覚える際のモデルとなる「よくできた保育園」だったのではないのでしょうか。50年続いた「定番」として、世代を超えた共有財産にもなり得ます。ネット配信の普及に伴い、家族と一緒に見るという機会も失われつつありますが、男女の描かれ方をはじめ、現代の視点から見れば違和感を覚える描写も「お父さん、お母さんの時代はこうだったんだよ」などとコミュニケーションをとることで、異なった価値観を学ぶきっかけにもなるでしょう。【聞き手・小林香花】

2025年12月3日（水）毎日新聞朝刊 9面より

この記事は毎日新聞社の承諾を得て掲載しています。